

第 6 回中心部震災メモリアル拠点検討委員会の振り返り

1 「災害文化」について

(1) 本拠点が目指す「災害文化」の特質

- ・ 災害文化をゼロから考えるのではなく、既にある日常の文化を自覚することが必要
- ・ 既存のパッケージとして存在するものではなく、災害が起きるたびに実践として学びながら作るもの
- ・ 「災害時に暮らしや命を守ること」「発災後における暮らしの代替性を確保すること」等、災害文化にも様々な意味がある

(2) ハザード（危機の要素）の捉え方

- ・ 自然災害に限らず、想像力で自分と様々なハザードを結びつけることが大事
- ・ 都市型のビジョンとしてマルチなハザードに対応していくこと
- ・ ハザードのみならず、それに対する社会の脆弱性もセットで考えることが大事
- ・ 脆弱性を乗り越えるだけでなく、受け入れることによる人間同士のケアも災害文化と考えれば、人類にとって普遍的な課題として発信していける可能性がある

(3) 仙台市と「災害文化」の関わり

- ・ 海も山もある 100 万人規模の都市として、様々な災害が起これ得ることから、ある種のショーケースとしての可能性。既に経験している都市でもあり、世界に向けて発信するにふさわしい立場にある

2 拠点のイメージについて

(1) 基本的な展開イメージ

- ・ 「博物館機能重視型」「広場機能重視型」「ミニマム（ネットワーク重視）型」のうち、「広場機能重視型」が災害文化の身体化に有効
- ・ 様々は人が日常的に来られるようなアクセシビリティも重要

(2) 広場のイメージ

- ・ 市民の自由な発想により、イベントや展示等ができる空間
- ・ 普段のルーティンと 3.11 で、変転できる空間
- ・ 一見何もなくとも、そこに想像力を担保できるようなもの
- ・ アーカイブされた記憶にいつでもアクセスできる雰囲気を持つ空間

(3) 他との協調

- ・ 仙台市内において広場機能を持つ他の構想と協調することも大事

3 「人」の重要性について

- ・ 人を介してつながっていくような伝承が大切
- ・ 現場性を持たない中心部において、伝承のよすがとなるのは人間的な要素（言葉、映像、本等）。必要な情報を聞き、集め、訳し、渡す人のチームが大切
- ・ 各地の施設や人をつなぐコーディネーターが大切
- ・ 人（運営の担い手、地域のサポート）を育てることが大切

4 拠点の役割・機能について

(1) 拠点の役割

- ・ 体験者が減る中で、経験を継承する拠り所であり、中心的な柱に本拠点になること
- ・ 経験の共有・蓄積・発信だけではなく、「新たな知恵の創造と社会への実装」を通じて、災害とともにある社会の姿を描き、自ら実行して世界に発信するという高い志を持つのが本拠点
- ・ これからの都市は災害をきちんと引き受ける姿勢を持ち、そのために本拠点のような場がないといけないという普遍的な取組みの先駆けになるべき

(2) 拠点の機能

- ・ 「新たな知恵の創造と社会への実装」の場とは、多様な人が集まり、活動するクリエイティブな空間（コワーキングスペースやアトリエ等）
- ・ 市民や大学等と連携した研究機能が必要
- ・ アーカイブについては、「3がつ11にちをわすれないためにセンター」など、仙台市として震災の記録は既にたくさんあるという認識のもと、それらを充実させ、育てていくことを軸に考えるべき
- ・ 市民が記憶を託す拠り所とすることで、市民と拠点との関係性をつくり、様々なハザードへの思考の入口とすべき
- ・ 震災伝承を担う人は、市民活動の担い手と重なることから、市民活動スペースを併せ持つことが必要

5 拠点の立地場所について

- ・ 災害文化を持つ仙台をシンボリックに伝える場所
- ・ 都市アイデンティティの構築に向けた決意や覚悟を表す
- ・ 既存施設や既にある人通り等の「まちの文脈」を活用し拠点を育てられる場所として旧城下町
- ・ 東部地域との差別化を図る観点から JR 仙台駅よりも西側
- ・ 「都市としてシンボリックなものを作る」「多様な人が集まる要素を備える」「財源や持続性」「市民活動との担い手の共通点」から、震災メモリアルだけではなく、他施設等との重ね合わせにより立地を考えるべき
- ・ 震災を経た仙台市が対外的に発するという趣旨から市役所周辺、広場性を持つことや音楽による復興という文脈から音楽ホールとの関連付け